# カナダのエネルギー開発

一九六三年から七三年の十年間に、カナダは他国と同様、エネルギー消費量の急増を見た。年平均五・五%の急増ぶりである。同期間の石油消費量も、それとほぼ同じ平均増加率であった（米国の石油消費量の伸びは年率四・七%、西欧が九・四%、日本が一五・六%、世界全体では七・七%）。一九七三年のカナダのエネルギー消費量全体に占める石油の割合は、約四七%だった（世界平均は四五%）。

カナダは輸出入合計で見ると石油の自給自足を果たしていた。しかしオンタリオ州などカナダ東部市場に供給するため、ベネズエラや中東から日量約百万バレルを輸入していることも事実だった。そこへ一九七三年の中東戦争が起こり、石油輸出国機構（OPEC）は大幅な原油値上げを断行した。選択的な輸出禁止政策をとった国もあり、七三―七四年の冬にはいわゆる〝エネルギー危機〟が発生した。一九七五年春までに、石油価格は七三年当時の四倍に達している。

こうした情勢の中で、ナショナル・エネルギー・ボード（公共的性格の強い石油・天然ガス・電力の特定部門を規制し、エネルギー資源の開発利用に関して政府に助言を与える機関）は、一九七四年に報告書を出し、国産石油が八二年以降オンタリオ州以東の市場をまかないきれなくなろうと述べた。

石油の大幅値上げと供給不安の結果、カナダ政府は一九七六年に、輸入石油への依存度を減らす新エネルギー政策の採用に踏み切った。その中でとられたエネルギー自立度強化の措置は、次のようなものだ。

○石油・天然ガスの漸次値上げ。
○あらゆるエネルギー資源の有効利用と節約。
○水力発電の促進。
○原子力発電への援助。
○石油・天然ガス・オイルサンドの各種プロジェクトに対する連邦政府の積極参加。
○国営石油会社ペトロ・カナダの設立（資源探査に従事し、研究開発を促進し、カナダ資本の主導性を強めることを目的）。
○国際エネルギー機関等を通じ、国際協力の推進。
○エネルギーの研究開発に対する連邦出資の増大。

研究開発の中でも、かなりの部分が再生エネルギー源に関するものとなりそうだ。再生エネルギーとは、消費しても再生できるエネルギーを言う。太陽エネルギー、風力、バイオマス、潮力、波力などがそれで、中でも太陽エネルギーの活用化が最も有望と見られている。

## 石油資源
### 注目を浴びるオイルサンド

カナダ政府と石油業界が、カナダには〝少なくとも見通せる範囲の将来にわたり〟需要を満たすだけの十分な石油・天然ガスがあるのだと確信していたのは、そう昔のことではなかった。

ところが情況は今や一変し、特に石油に至っては暗い見通しが囁かれている。事実、石油の確認埋蔵量はジリジリと減りつつある。つまり確認されている埋蔵量は、新たな石油が発見されるより速い速度で枯渇しつつあるということだ。

このようにカナダの推定石油資源量が下方修正された裏には、もちろん資源評価技術の向上ということがあるが、同時にそれは客観的事実をより慎重に、控え目に解釈しようとする態度の反映でもある。

では、どのくらいの石油と天然ガスがあるとわかっているのか。ナショナル・エネルギー・ボード（NEB＝エネルギー庁）の報告によると、一九七七年時点の通常原油確定埋蔵量は、次の通り。

| | |
|---|---|
| これまでに発見された総量 | 二二四五 |
| これまでの生産量 | 一三二六 |
| 残存（確定）埋蔵量 | 九一九 |

（百万立方米）

つまり、カナダはこれまでに発見された通常原油全体の半分以上をすでに採掘、消費してしまったことになる。しかもさらにその半分は、わずかこの十年間に消費した分なのだ。

NEB報告では、カナダ西部の天然ガスの〝究極的に採掘可能な確定埋蔵量〟（一九七八年末時点）を一兆九千億立方米としている。これらのすでに確認された量のほかに、あとどのくらいの石油・天然ガスを発見できるのだろうか。

西部の通常油田のほかに、将来生産が確実視されている地域、または可能視されている地域として、マッケンジー川デルタ地帯、ボーフォート海、北極諸島、カナダ東岸沖の大陸棚などがあり、これらは石油のフロンティア地域として注目されている。

連邦政府の推定によると、カナダには未発見の通常原油が二十五～五十四億立方米あり、その五分の四までがこれらフロンティア地域で発見されるだろうという。ただし、これまでに〝確定〟されているのは、まだわずか数千万立方米にすぎない。

天然ガスでは、四兆一千億～八兆三千億立方米が存在すると推定されており、そのうち十分の九がフロンティアにあるという。これまでにフロンティアで発見されたのは、六千億立方米である。

**オイルサンド**

カナダには、もう一つ有望な石油資源がある。アルバータ州北部にあるオイル